

巧言令色鮮矣仁

昭和33年の4月、あこがれの香川大学学芸学部の校門をくぐることができた。中学校課程の国語科の専攻を認められたのである。藤川正数先生の漢文学のテキストは小さな漢字の並んだ薄いものだった。それでも1年間で読み切ったようには覚えていない。骨の折れる学習だった。なぜかこの言葉は記憶に残っている。木訥な私の人間性を肯定されたように感じたからであろうか。論語読みの論語知らずで、今日まで来てしまっている。

改めて古典学習の意義とは、何だろうかと考えて生活に役立てないのなら意味がないではないかと気づいた。巧言令色鮮矣仁、おべんちゃらを言うような人は信用ならんと言うことだと思うが、詐欺事件の被害者のなんと多いことか。あなたのためだと言われてその気になり相手のもうけ話に貢献する。全財産をつぎ込んでしまう者もあるらしい。甘い言葉には裏がある。

政治家の巧言は、もっと巧言かもしれない。今辛抱しておれば将来はきっと良くなるような夢を抱かせたり、戦後レジームからの脱却と言って戦争を聖戦化したり、自分たちの主張に反対する勢力を抹殺する憲法を作ろうとしている。構造改革という言葉で日本の資産はどこかに流れている。岩戸景気とか言われ20年も経済成長が続いたのに一般の人々は毎年年収を減らし続けている。

デフレからの脱却というキャッチフレーズもインフレを起こして借金をチャラにしようと言う魂胆が見え隠れしているはず。

原子力発電も日本では危険で必要ないものであるにもかかわらず使い続けようとしている。原子力発電をしないと日本の経済が成長しないと言う主張である。今原電では、稼働していないので、利益が大きいという。働かないで収入が保証されているので、原電の本心はどこにあるか。考えてみるまでもなからう。

耳に快い言葉が聞こえてきたら、いつもだまされるのではなく、その本心を見通して対応を誤らないようにしたいものである。学ぶことは変わることであると、行動が変わらなければ学んだことにはならないと現職の時よく言ったものである。巧言令色鮮矣仁の場面に臨んで巧言にだまされることにならないことこそ古典を生かすことである。

高橋 正好（学芸・昭和37年卒）